



## ゆめときぼう

### おとうさんの ちず

ユリ・シュルヴィッツ 作 さくま ゆみこ 訳 あすなろ書房 E-シ

せんそうでぼくのかぞくはなにもかもうしなった。なつはあつい、ふゆはさむいひがしのくにのちいさなへやで、おもちゃもほんもなく、たべるものもたりなかった。あるひ、いちばへパンをかいにでかけていったおとうさんが、かってかえてきたのはパンではなく、ちずだった。つぎのひ、おとうさんがかべにちずをはると、くらいへやにいろがあふれた。

### ギリシア神話

石井 桃子 編・訳 のら書店 991-ギ

おおむかし、きょじんのエピメテウスの家に神がみのつかいが、うつくしいしょうじょパンドラをつれてきました。エピメテウスがしょうじょを家にいれてたのしくすごしていると、「けっしてあけないように」とつけられたおもひこが、またかみからとどきます。ひといちしりたがりやのパンドラは、その箱のなかに、なにがはいっているのか知りたくて、がまんができなくなりました。（『パンドラ』）

### 赤いめんどり

アリソン・アトリー 作 青木 由紀子 訳 福音館書店 933-ア

むらのちいさないえに、ひとりぼっちのおばあさんがすんでいました。あるばん、はな話しあいてがほしいとひとりごとをいったとき、ドアをノックするおとがきこえ、あけるとちいさなあかめんどりがおり、家のなかにはいつてきました。めんどりをあたらしいねどこに入れねるしたくをしていると、ドアをらんぼうにたたくおとがします。とぐちにいたのは、くろずくめの男でした。

## なまえのないねこ

竹下 文子 文 町田 尚子 絵 小峰書店 E-マ

ねこはだれにもなまえをつけてもらったことがありません。まちのねこたちはみんななまえをもっていて、くつやさんのねこはレオ、ほんやさんのねこはげんた、おてらのねこはじゅげむです。「ぼくもなまえほしいな」というと、じゅげむは「じぶんでつければいいじゃない」といいます。ねこはまちをあるきながら、じぶんのなまえをさがすことにしました。

## たくさんのお月さま

ジェームズ・サーバー 文 ルイス・スロボドキン 絵  
なかがわ ちひろ 訳 徳間書店 E-ス

海<sup>うみ</sup>べの<sup>おうこく</sup>王国に、レノアひめという<sup>じっ</sup>十さいのおひめさまがすんでいました。あるひ、ひめはびょうきになってしまいます。父<sup>ちちぎみ</sup>君である<sup>おう</sup>王さまがすぐにとんできて、「なにかほしいものはあるか？」とたずねると、レノアひめは、「お<sup>つき</sup>月さまがほしい」とこたえました。王<sup>おう</sup>さまによ<sup>けらい</sup>ばれた家来たちは、「<sup>つき</sup>月はだれにもとれません」といいます。

## 飛びたかった人たち

佐々木 マキ 作 福音館書店 538-サ

むかし、鳥<sup>とり</sup>の羽<sup>は</sup>根<sup>ね</sup>を植<sup>う</sup>えた翼<sup>つばさ</sup>を身<sup>み</sup>につけて飛<sup>と</sup>ぼうとした人<sup>ひと</sup>たちがいたころ、天才<sup>てんさい</sup>レオナルド・ダ・ヴィンチは<飛<sup>ひこう</sup>行>を初<sup>はじ</sup>めて科<sup>かが</sup>学<sup>がく</sup>的<sup>てき</sup>に研<sup>けん</sup>究<sup>きゅう</sup>しました。それから300年<sup>ねん</sup>ほど後<sup>あと</sup>、イギリスの学<sup>がく</sup>者<sup>しゃ</sup>ケイリーが、空<sup>くう</sup>気<sup>き</sup>より重<sup>おも</sup>い航<sup>こう</sup>空<sup>くう</sup>機<sup>き</sup>を飛<sup>ひこう</sup>行<sup>ぎょう</sup>させるには、翼<sup>つばさ</sup>の上<sup>うへ</sup>と下<sup>した</sup>の空<sup>くう</sup>気<sup>き</sup>の流<sup>なが</sup>れが作<sup>さ</sup>用<sup>よう</sup>することを証<sup>しょう</sup>明<sup>めい</sup>します。大<sup>おお</sup>空<sup>ぞら</sup>を飛<sup>と</sup>ぶことは、長<sup>なが</sup>い間<sup>あいだ</sup>人<sup>じん</sup>類<sup>るい</sup>の夢<sup>ゆめ</sup>だったので。

## まぼろしの小さい犬

フィリパ・ピアス 作 猪熊 葉子 訳 岩波書店 933-ピ

おじいさんはベンに、誕<sup>たん</sup>生<sup>しょう</sup>日<sup>び</sup>に犬<sup>いぬ</sup>をやろうと約<sup>やく</sup>束<sup>そく</sup>してくれました。その日<sup>ひ</sup>からベンは、何<sup>なん</sup>か月<sup>げつ</sup>も犬<sup>いぬ</sup>のことばかり考<sup>かん</sup>えつづけま<sup>す</sup>。ところが、おじいさんからの贈<sup>おく</sup>り物<sup>もの</sup>は、小<sup>ちい</sup>さな一<sup>いち</sup>枚<sup>まい</sup>の犬<sup>いぬ</sup>の絵<sup>え</sup>でした。期<sup>き</sup>待<sup>たい</sup>を裏<sup>うら</sup>切<sup>ぎ</sup>られたみじめさで胸<sup>むね</sup>がいっぱいになったベンは、やがて目<sup>め</sup>をつぶると、ほんもの<sup>ちい</sup>の小<sup>いぬ</sup>さい犬<sup>み</sup>が見<sup>み</sup>えてくるようになりました。